令和3年度埋蔵文化財調査一覧

発掘調査

No.	遺跡名	所在地	事業名	開発面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間
1	船上城跡　第18地点（FN18-2）	西新町3丁目17-1他	共同住宅	1454	675	令和3年4月5日～7月27日
2	天王後遺跡（TEN1-2）	魚住町西岡字天皇後1643他	宅地造成	2,323.67	385	令和3年4月7日～5月31日
3	明石城武家屋敷跡 茶園場町　第2地点（SA2-2）	茶園場町1766番5	個人住宅	121.88	61	令和3年4月22日～5月1日
4	明石城武家屋敷跡 大明石町　第43地点（OA43-2）	大明石町2丁目1323番4	駐車場		113	令和3年4月26日～7月28日
5	太寺廃寺　第29地点（TD29-1）	太寺1丁目128番5	個人住宅	256	194	令和3年5月12日～7月1日
6	八木遺跡　第2地点（YGⅡ2-2）	大久保町八木字大溝144番1の一部、144番4の一部、145番1	宅地造成	1359.74	143	令和3年5月13日～5月31日
7	太寺廃寺　第29地点（TD29-2）	太寺1丁目128番1	個人住宅	211	153	令和3年6月1日～7月1日
8	北出口遺跡　第3地点（KD3-2）	大久保町松陰山手164番、165番	共同住宅	1,095.30	6	令和3年6月2日～6月3日
9	明石城武家屋敷跡 大明石町　第44地点（OA44-2）	大明石町1丁目5番6、5番7	共同住宅	427.01	301	令和3年6月8日～
10	太寺廃寺　第29地点（TD29-3）	太寺1丁目128番8	個人住宅	139.05	136	令和3年6月15日～7月1日
11	明石城下町町屋跡 本町　第20地点（HO20-2）	本町2丁目6-7、6-8、6-9、6-10他	集合住宅	514.93	285	令和3年6月15日～
12	明石城武家屋敷跡 西新町　第6地点（NS6-2）	西新町2丁目3番11～13、3番28	共同住宅	693.68	274	令和3年6月17日～7月16日
13	船上城跡　第18地点（FN18-3）	西新町3丁目17-1他	共同住宅	1432	568	令和3年7月5日～
14	明石城武家屋敷跡 桜町 第26地点（SAK26-2）	桜町1039番8、-12、-13、-14	ビル	193.32	156	令和3年7月9日～
15	明石城武家屋敷跡 桜町 第27地点（SAK27-2）	桜町1056-1の一部	保育園	481	170	令和3年7月13日～8月4日

調査地位置図（S=1/50000）

太寺遺跡第 29 地点発掘調査概要

1　所在地　　明石市太寺 1 丁目 128 番 1 他

2　開発事業名　個人住宅建設

3　調査主体　　明石市

4　調査担当者　稲原昭嘉

5　調査の種別　発掘調査

6　調査期間　　令和 3 年 5 月 12 日～7 月 1 日

7　調査面積　　約 360 ㎡

8　調査概要

調査地点は、高家寺の南 300m、月照寺の北 150mの位置に当たり、段丘が平野部へと下っていく縁辺部に立地している。現地表面より約 40 ㎝下から奈良時代から平安時代の時期の地層が確認された。そこからは、直径 30 ㎝、深さ 60 ㎝の掘立柱建物の柱跡が約 80 基見つかった。また、土器や瓦を廃棄した土坑も見つかった。これらは、おおむね正方位を向いている。土坑からは、播磨国府系瓦のうち、本町式とよばれる軒平瓦が 2 点出土した。播磨国府系瓦とは播磨地域の官衙や駅家などから多く出土する瓦で、播磨国司の管理下で生産し、配布されたと考えられている。かねてより、当地周辺は明石駅家の比定地として有力視されていた場所であるが、見つかった多くの柱穴は官衙施設に伴う建物ではなく、また、土師器甕など日常の器も出土していることから、駅家などではなく、通常の集落であったと考えられる。時期的には 8 世紀後半から 11 世紀まで及んでおり、周辺に駅家があり、その駅家を支える駅戸の集落であった可能性が高いとみられる。

この時期の遺構群の下部からは、7 世紀前半から中葉にかけての大型の掘立柱建物跡も見つかった。柱穴は直径 70 ㎝、深さは 55 ㎝で、約 30 ㎝の柱痕が残るものもあった。柱と柱の間隔は 2.5m で、3 間×3 間以上のものが見つかっています。

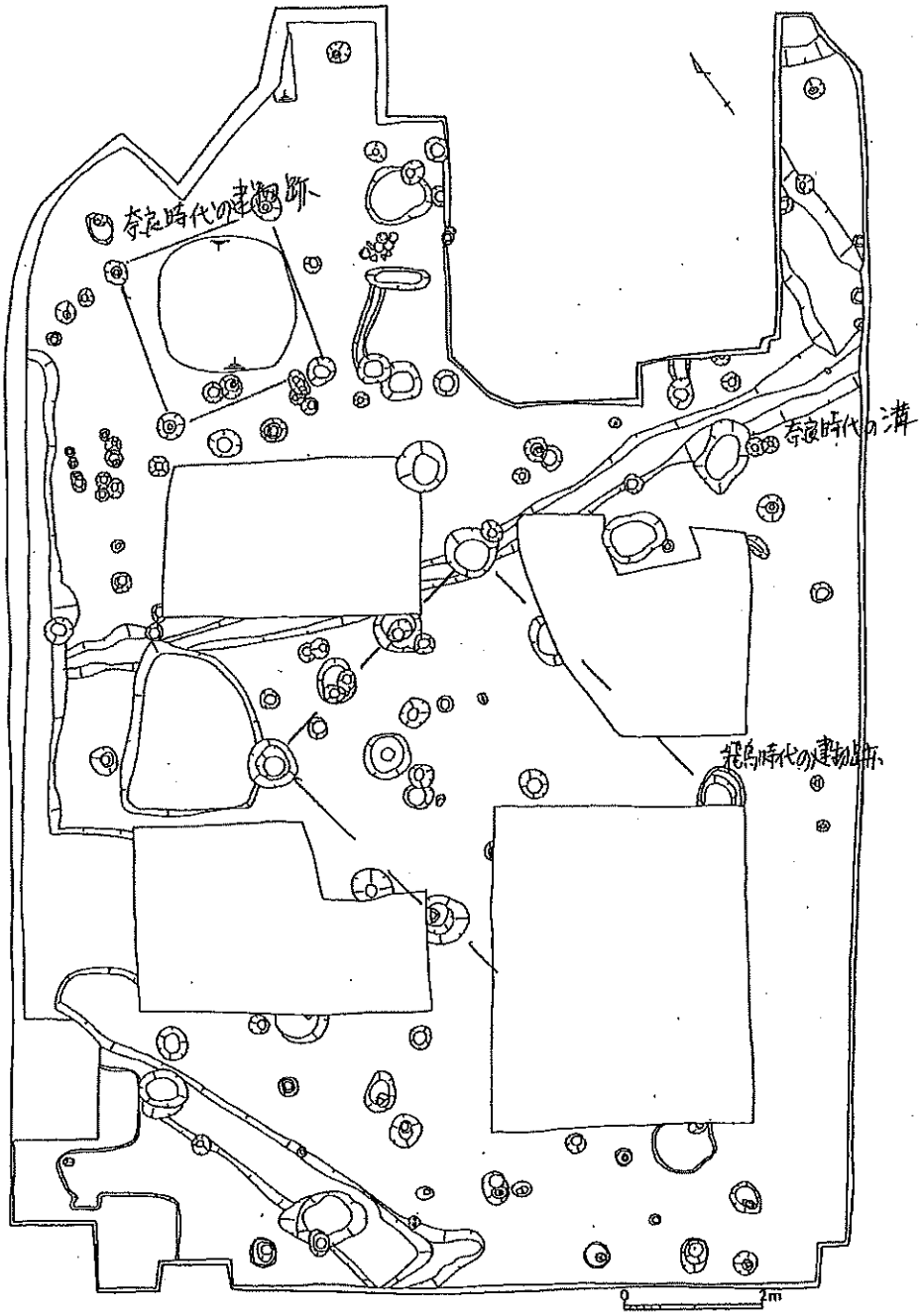
また、住居に伴う竈や、須恵器杯身や高杯、碧玉製の紡錘車なども見つかるなど、当地に有力氏族の住居があったことが明らかとなった。調査地近隣に古墳があったと推定されており、古墳時代に当地を支配していた有力な豪族につながるものと見られる。

この氏族は、太寺廃寺の創建にも深く関わり、その後、明石駅家の管理をも担った可能性が高いと判断される。

今回の発見により、7 世紀後半に創建された太寺廃寺の創建以前の当地の姿の一端が明らかになったとともに、8 世紀以降、明石駅家と関連すると考えられる集落が発見されたことで、いまだその所在地が不明であった明石駅家の位置を推し測り、駅家周辺の状況を解明していくうえでもきわめて重要な発見となった。

1：13,000

0 100 500 1000m

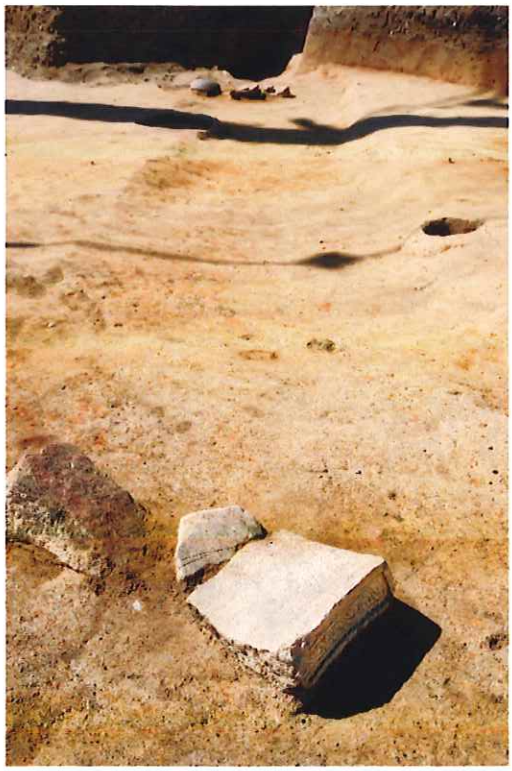

奈良時代の建物跡
奈良時代の溝
飛鳥時代の建物跡
0
2m

調査地

飛鳥時代の遺構

飛鳥時代の掘立柱建物

奈良時代の掘立柱建物



播磨国府系瓦出土状況

播磨国府系瓦

神戸新聞　（第3種郵便物認可）

7～11世紀の集落跡

太寺廃寺跡近くの現場

市が発掘　有力氏族が居住か

明石市は、旧明石郡で最古の寺院跡「太寺廃寺跡」近くの住宅建設現場（太寺1）で、7世紀前半～11世紀後半の集落跡が見つかったと発表した。祭祀用具や、当時の公的施設で使われたとみられる瓦なども出土。専門家は、太寺廃寺の創建と、その後にできた「駅家」の管理に関わった有力氏族が住んでいた可能性が高いとみている。

（長尾亮太）

市の発掘調査は、住宅建設に伴って5～6月に行われた。調査場所は、高家寺境内にある太寺廃寺跡の南西約300㍍、月照寺の北約150㍍に位置する。

地下約60㌢の飛鳥時代（7世紀前半）の地層から、柱を据えるための15基の円形穴を確認。穴は直径約70㌢、深さ約55㌢。柱穴列から少なくとも7・5㍍四方の掘っ立て柱建物跡と分かった。

また、いずれも祭祀に使われたとみられる石製の紡錘車（直径4・3㌢、高さ1・6㌢）、皿形の杯身（直径14・8㌢、高さ4・2㌢）、杯身に脚が付いた高杯（直径11・8㌢、高さ13・6㌢）など7点の器も見つかった。これらは野焼きで作られた土師器ではなく、登り窯で焼かれた須恵器だった。

発掘調査で見つかった集落跡＝明石市太寺1

奈良―平安時代の地層からは、掘っ立て柱建物の柱跡約80基、瓦2点などが見つかった。この瓦は播磨地域の公的な建物でよく使われる「播磨国府系瓦」だったことから、中央と地方間の連絡を担う役人が馬を乗り継いだ「駅家」との関連がうかがえるという。

播磨国府系瓦は、奈良時代に播磨国司が直属の工房で作らせ、国の役所である国衙や駅家などの公的施設に配布したと考えられている。

他方、平安時代の法令集「延喜式」や歴史物語「大鏡」に出てくる明石駅家の所在地は特定に至っておらず、太寺廃寺▽上ノ丸地区▽大蔵中町遺跡―の周辺などが候補地に挙がっている。

7世紀前半のものとみられる高杯（手前）や杯身（中央）の須恵器。石製の紡錘車（右奥）やかまど跡などとともにまとまって出土した＝明石市太寺1

出土した播磨国府系瓦（明石市提供）

見つかった奈良―平安時代の掘っ立て柱建物跡は柱穴が直径約30㌢と大きくなく、雑器が出土していることから、周辺に駅家があり、連絡役の役人や馬を世話する人の集落だった可能性が高いという。

稲原昭嘉・市文化財担当課長は「7世紀後半～8世紀初頭とされる太寺廃寺の創建前の現地の姿をうかがわせる。不明だった明石駅家の所在地を推し量る上で重要な手がかりとなる」としている。

見つかった遺物は、10月30日から市立文化博物館で開催予定の「発掘された明石の歴史展―明石の古道と駅・宿」に出品される。

過去には埴輪片、工房跡出土

明石市太寺地区は、同市から神戸市西区、垂水区にまたがる旧明石郡で最古の寺院「太寺廃寺」があったことで知られるが、これまでの発掘調査では寺域の外でも遺物や遺構が見つかっている。

市は1990年以来、太寺廃寺の寺域の内外で発掘調査を重ねてきた。

播州信用金庫明石支店（太寺2）の敷地では、6世紀半ば（古墳時代後期）の円筒埴輪の一部が出土した。この地の小字名は「大塚」で、全国的に古墳がある地域でみられる地名であるため、周辺に古墳があった可能性が高いという。

また、太寺廃寺の後身である高家寺の北約30㍍にあるマンション敷地（太寺2）でも、寺の建立時に仏具を鋳造した工房跡とみられる遺構が見つかった。

稲原昭嘉・文化財担当課長は「有力者が建造するものが、古墳から寺院へと時代とともに移り変わったプロセスが太寺地区では見て取れる」と話している。

（長尾亮太）

明石城武家屋敷跡大明石町第 43 地点掘調査概要

1　所在地　　明石市大明石町 2 丁目 1323 番 4

2　開発事業名　駐車場造成工事

3　調査主体　　明石市

4　調査担当者　稲原昭嘉、中原紀代美

5　調査の種別　発掘調査

6　調査期間　　令和 3 年 4 月 26 日～7 月 29 日

7　調査面積　　約 113 ㎡

8　調査概要

調査地点は、明石城の中堀に面した明石藩の重臣が居住する区画に位置する。江戸時代の中期に越前松平家が入封して以来、その重臣であった織田家が居住している。現在も織田家の末裔が住んでおり、長屋門と土塀は市の指定文化財となっている。調査地点は長屋門の西に当たり、この度、駐車場を造成するに際し、排水溝を設置する工事が予定されたため、事前に発掘調査を行う必要が生じた。

調査はⅠ区とⅡ区と 2 工区に分けて行った。

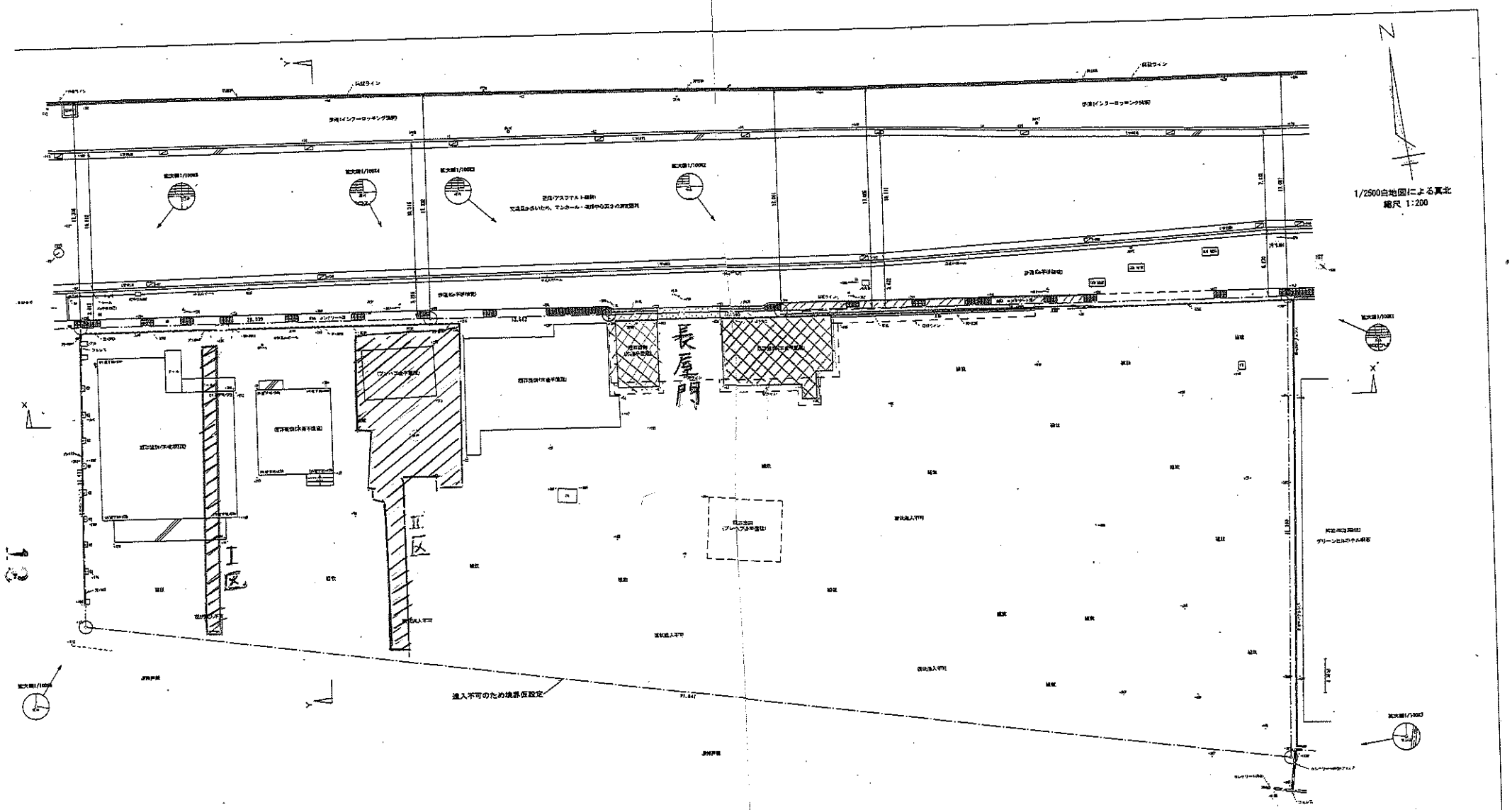
Ⅰ区は、幅 1mで、長さ 22mの南北に長い調査区で、中央付近から径 2.3mの井戸跡が見つかった。井戸側は残っていなかったが、桶と見られ、その中位に竹筒がつながれ上水井戸として利用していたことが土層観察からうかがえた。

井戸より 1m南では南北 7m、深さ 1mの池が確認された。池の北縁には石が並べられていた。

Ⅱ区では、北側の塀から 3m南の位置で、40～50 ㎝台の石が東西方向に、南に面を向けて並んでいた。Ⅰ区においてもその延長上で石が確認されており、江戸時代の長屋の南端に設けられた礎石であるとみなされた。この石列より北側は黄色い土が固く叩き締められており、長屋の土間であったことが伺える。石列の一部には礎石が抜けているところがあり、その南に約 80㎝ の長さの延石が東西に据えられていた。この延石の北側の三和土面で胞衣壺が 6 個、延石の南側で 1 個、見つかっている。玄関部に当たることがわかる。石列の南側では三和土面より 40～50 ㎝低くなっており、そこに、40～60㎝の上面が平坦な石を 9 石、飛び石状に配していた。長屋の玄関部へとつながる石である。#

また、東端では竈跡や多量の瓦を埋めた廃棄土坑などが見つかっている。江戸時代初期から幕末にかけての多くの陶磁器類が見つかっている。#

また、江戸時代の地層の下部からは南北間約 41;m、東西間 418mの一部に礎石をもつ柱穴も見つかっており、内部からは中世の須恵器や土師器が見つかっている。江戸時代に武家屋敷として整備される以前から当地には人が居住していたことを示す貴重な資料となった。



株式会社　太陽社　邸現況図

営業　：　神戸支店　中村
現況　：　弥和建設開西　新田
調査日　：　令和　1年　6月13日

境界杭	：	有	無	一部有
隣地立会	：	有	無	
官民立会	：	有	無	
設計立会	：	有	無	

＊測点、交点、計算点は営業担当指示によります。

汚水桝	有	無	不明
水道	有	無	不明
ガス	有	無	不明

この図は地積測量図ではありません
現況に基づき測量しております
公簿面積とは異なることがあります
転用・複写はできません
建築工事以外の目的には使用できません
隣家の状況については概略です

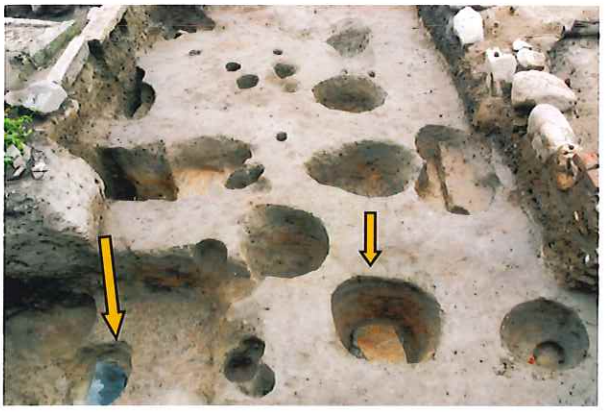
Ⅰ区　池の北側　縁石検出（西~）

Ⅱ区　調査全景（西~）

Ⅱ区　三和土面胞衣壺検出（南~）

Ⅱ区　胞衣壺（No.6）

Ⅱ区　中世柱穴検出（北~）



Ⅱ区　中世柱穴内の礎石が見える（東~）